

氏 名	早 川 陽
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 340 号
学位授与年月日	平 成 23 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉山水風景、或は盆景 〈論文〉日本画の景色観としての盆景性ーその振じれと可能性ー
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 本 郷 寛
(論文第 1 副査)	〃 准教授 ( 〃 ) 小 松 佳代子
(作品第 1 副査)	〃 教 授 ( 〃 ) 木 津 文 哉
(副査)	〃 准教授 ( 〃 ) 齋 藤 典 彦
( 〃 )	〃 教 授 ( 〃 ) 佐 藤 道 信

(論文内容の要旨)

景色は一般に人々が認識する目に見える物理的な世界であると同時に、画家によって絵画の制作対象とされる主体的な一つの表現世界として存在している。制作者として景色を作品化するには、過去の画家の眼差しを絵画の意味として読み込み、今必要な世界観を再構築することが必要である。私は日本画の絵画技法を基礎に置き、現在では主に景色を対象に制作している。同時に明治期に美術から切り離された文化としての景（山水性のある自然）を身近に観察し、教育現場では過去の絵画の景色観に触れるための美術カリキュラムを実践している。そのなかで近代絵画としての日本画の景色と、盆景文化や美術教育の場にある景を取り巻く全体の動きがあることに気がついた。

本論文では景色を日本の美術、教育、文化的背景として追究する目的から、「日本画の山水画と風景画の揺れ」として日本画の景色モデルを見出した。そして「日本画の山水風景の景色」から特徴としての盆景性を導き出し、盆景文化の景とランドアート以降の日本画の場所、さらには美術教育の景色観としての景を、近代以降の「振じれ」として考察する。それらの複合的な景は日本画の景色モデルと共通性を持ち、景色表現の構造や関係性が見出される。

景色は芸術や文化の試みによって意識的に取捨選択され、複合的な景としての歴史的な結合過程をもつ。このことから現代に生きる我々にはこの流れのある景そのものを俯瞰する視点が必要であると考えた。総体としての景色を明らかにすることで、美術教育の意味、日本画の景色の意味を現在につなげる可能性が見出される。

本論文の構成は 6 章からなる。まず「日本画における山水風景表現の盆景性について」をまとめ、盆景性から日本画モデルを見出した。ここから盆景文化の歴史的な位置付けを具体的に明らかにし、芸術から切り離された盆景性と日本画の共通性を探った。そして絵画の生きる場所を考察するために、日本画の場所とランドアート以降の景色との関わりを示した。さらに絵画教育における景色の扱われ方、子ども達がどのように景色を持つのかを明らかにした。このことから現代において景を構造化し、環境全体としての景を捉える複合的な視野を獲得する可能性を示した。

第 1 章では山水と風景を併せ持つ日本画の景色としての意味を探った。画家は外界の景を意識的にみる存在であることから、雪舟等揚（山水実景）、横山大観（山水風景）、東山魁夷（風景）の観ていた景

を読み解いた。絵画を描くことは必要なイメージソースを意識・無意識的に選択し、組み替える行為である。このことから山水画と風景画の景色表現を山水風景の景の揺れとして見出した。また景色の意味と、主体との関係性による景の状態についても触れる。

第2章では盆景の意味を時間的、空間的に明らかにした上で、日本画として残された絵画の窪地性について明らかにした。過去の絵描きは何を対象に選び、それをどのように捉えて制作の実践として残したのか。ここでは土地の起伏から鉢植えの絵画までスケールを移動しながらモチーフの意味を明らかにした。山水と風景の混ざったハイブリットな絵画が日本画であり、その特徴に盆景性がある。絵画として残されたイメージの意味を読み解くために、景色を構成する要素を探った。

第3章は「風景化する山水・山水化する風景」と題し、景色の総体を「日本画の景色モデル」として明らかにした。ここから各時代の山水風景の「揺れ」を考察した。山水画でも風景画でもなく「景」そのものを対象とすることで、近代からの現代までの「景色」を俯瞰できる。山水が風景化する中で、また自然が環境化することで都市空間そのものに山水性が引き込まれモデル化されるのである。

第4章では日本画の創出期における山水性の価値は、独自性として景の盆景性を描き出したことから、盆栽や庭園などの盆景文化に見られる影響を探った。そこに於いて日本画で述べた山水風景の流れと同じように、公園と盆栽の成立に西洋的な知覚様式の影響がどのように関わっているのかを明らかにした。また私自身、盆栽鉢をつくる経験から、小品盆栽の鉢づくりの時代経緯を明らかにすることで、盆栽の価値がどのように変化したのかを観察した。そして、これらの「掬じれ」の生じた庭や盆栽を、盆景文化の景として再考し、山水風景の構造に当てはめることで景のターニングポイントとして捉えた。

第5章ではランドアート以降の作家が環境そのものをモチーフとし、空間の設定にかかわった点に注目する。その影響から日本画においても景色観の再構築が必要になり、制作発表の場所や空間を読み解くことが制作者の能力の一つになったと考えた。そこで私自身の経験から制作対象となる場所の可能性を述べた。主に企画に関わった「海の向こうより山の向こう」展覧会について考察することで、廃校の意味や美術の地域性とは何だったのかを日本画の景色モデルとの関係から検討した。

第6章では子ども達が持っている世界観から、見ている景色と教育の景色観を明らかにした。子ども達の空間認識はもともと風景的でないが、次第に原初的な方法を捨てて風景化していく。また現代の社会景色構造が変化していることを示した。ここから過去の景色表現にかかわる美術教育カリキュラムを再考するために景色教育の過程を記述した。そして日本画の眼差しを景色教育の授業として具体的に取り込むことの可能性を明らかにした。美術を広く景の教育として考えたときに、日本画で試された世界観を通して景色をみる経験は今日改めて必要な視点である。

以上のように、山水画でも風景画でもなく景色そのものの歴史的結合過程を追究することで、近代からの現代までの景色観を獲得できると考えた。絵画の意味を絵画のみから知るのではなく、景の成り立ちとして盆景文化を含めて重層的に俯瞰する。このことから日本画の景色観を通した盆景性と、景色の掬じれを構造化することが可能になるのである。

#### (博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、筆者が修士論文以来一貫して追究してきた日本画の景色観の変遷についての研究を発展させ、日本画のみならず生活文化、教育、ランドアートなど様々な分野にまで目を配り、そこらに共通して見られる盆景性をあぶり出すことで、日本画の景色観を問い直す意欲的な論文である。筆者は日本画の制作者であり、その立場から絵画に描かれた景色が過去の画家の眼差しであると捉え、また絵画がそれ独自で存立していたのではなく、盆栽や庭園など現在は絵画と切り離されている生活文化と深く結びついていたという視点から自らの絵画制作に必要な世界観の構築を目指した。その意味で本論文は制作者が理論研究をするからこそ持ち得た課題意識の結実である。日本画をとりまく歴史的・文化的な背

景について文献を渉猟するとともに、これまで自らが行ってきた制作、ワークショップ、教育活動などが、日本画の景色モデルの今日的可能性を探る活動であったことを見いだしたことも大きな成果である。

論文の前半では、明治期に成立した日本画が山水と風景を融合させた絵画であると捉えて、時代によって山水と風景の間で揺れる日本画の景色の変遷を歴史的に考察している。その中で土地の起伏を描くスケールの大きな景色においても鉢植えを描く微視的絵画においても、窪地性という共通の特徴が日本画には見られることを見いだした。

このような盆景性が日本画のみの特徴ではなく、盆栽や庭園などをも貫くものであることから、それらが同じ景色を違うかたちで表現したものであることを見いだした。それは、美術の中に位置づけられた日本画の独自の発展の中では失われた過去の画家の見ていた景色が、むしろ盆栽や庭園など、美術の範疇ではなく生活文化の中で受け継がれてきたものの中に今なお残っているということの発見でもあった。この発見をしたことが本論文の卓抜な点であろう。

論文の後半では以上のような考察で得た知見を現在の美術・教育状況において生かす可能性について考察される。ランドアートなど環境そのものをモチーフとした表現や、発表の場所や形態を問い直す美術制作なども、日本画の景色モデルとの関係で考察することでその意味が明らかになる。また、美術を広く景の教育として捉え直し、日本画が有していた世界観を美術教育実践に取り入れる可能性を論じ、現代の景色観とそれが今後どのように展開していくかについての考察も試みている。

日本画に描かれた景色は絵画のなかにもみあるのではなく生活や文化のなかで生み出されたものであり、また逆にその絵画表現が人々の景色観を変容させていくというダイナミズムのなかにある。盆景についてこのように重層的に探究することによって、日本画の変遷の歴史的意味を構造化して捉え直し、また美術の教育が過去の作家の見方を知るという意味でも、あるいは人々のものの見方に影響を与えるという意味でも非常に重要であることを見いだしたことが本論文の特に優れた点である。以上のような点から、審査会において課程博士論文として非常に高い水準にある優れた論文であることを審査員全員一致で評価し、合格と判定した。

#### (作品審査結果の要旨)

提出作品、「山水風景、或は盆景」は5枚のパネルで構成された作品である。申請者は山水画を長年にわたり継続して研究・分析し、「桃源郷」という記号を自作品の中に何とか定着させようと、試みを重ねてきた。申請者が学習・鍛錬を重ねてきた日本画の文脈の中でさらなる展開を求めて南画や水墨画の要素を取り込み、従来の日本画とは一線を画する作品を思考している点は、評価の分かれるところではあるが、筆者が山水画と平行して研究してきた「盆景」或は「盆栽」の持つ世界観を取り込み、独特の作品世界を構築しようとする試みは、他にあまり類を見ない挑戦であり、そのオリジナリティも評価の対象となった。

遠景・中景・近景にそれぞれ自然風景の要素を配し、人間の心の中にそれぞれ存在するある種の懐かしさを伴う憧れの地、まさに「桃源郷」を申請者独特の感性で捉え、平面状に再現しようとした試みは、一定の成果を上げている、と判断され審査員の評価の対象となった。大下図の段階から幾つもの段階を経て、構成を練り直し大画面へと構築していくプロセス・試行錯誤を繰り返す中で申請者の感覚や物理的な描画態度の向上も認められ、その点も評価の対象となった。

他者からはうかがい知れない内面世界の中で展開されている筆者独特の絵画世界を、大画面の中で展開させようとし、なおかつ申請論文とも内容的に密接に関係がある描画テーマを具現化させる挑戦はある種の完成が見て取れる、とし、審査員全員一致で合格と判定した。

(総合審査結果の要旨)

早川陽君は、修士課程、博士課程を通して盆景をテーマとした日本画の実技研究を一貫して続けてきた。また、理論研究として、自らの制作テーマでもある日本画の景色観についての研究を行い、日本画が有していた世界観を美術教育実践に取り入れる研究に取り組んできた。

提出作品の「山水風景、或は盆景」は、縦182cm、横87cmのパネル5枚で構成された日本画作品である。

提出作品の審査において、作者が山水画を長年にわたり研究してきた中で、自身の絵画表現に「盆景」や「盆栽」の持つ世界観を取り込み、従来の日本画の景色観とは異なる独自の作品世界を構築しようと試みたことは、他にあまり類を見ないとして、その独自性が評価された。また、作者自身の世界観にある、人間の心の中にそれぞれ存在する憧れの地としての「桃源郷」を作者の持つ独特の感性で捉え、緻密な線描の積み重ねを通して表現している点は、一定の成果を上げていると評価された。

下図の段階から完成まで、試行錯誤を繰り返す中で、作者の感覚や描画姿勢の変化が見られ、作品としての今までにない向上が認められた点も評価の対象となった。

他者からはうかがい知れない内面世界の中で展開されている作者独自の絵画世界を、大画面の中で展開させようとし、なおかつ作者が真摯に取り組んだ理論研究を通して培われた絵画観が、一つの新たな絵画表現として結実している事も評価された。

審査の過程において、申請者の作品は新しい表現としての試みとして大いに評価されるものであり、完成度も高く優れており、そしてこの作品制作のプロセスを踏まえた上で、独自の世界観を有する作品であり、博士課程における実技制作研究の成果が認められるとして審査員全員一致で高く評価した。

提出論文は、修士論文以来一貫して追究してきた日本画の景色観の変遷についての研究を発展させ、日本画のみならず様々な分野にまで目を配り、そこに共通して見られる盆景性を見い出すことで、日本画の景色観を問い直すとする意欲的な論文として完成している。

審査の過程において、日本画をとりまく歴史的・文化的な背景について文献を渉猟するとともに、これまで自らが行ってきた制作、ワークショップ、教育活動などが、日本画の景色モデルの今日的可能性を探る活動であったことを見いだしたことは大きな成果であるとされた。

そして、日本画の独自の発展の中では失われた過去の画家の見ていた景色が、むしろ盆栽や庭園など、美術の範疇ではなく生活文化の中で受け継がれてきたものの中に今なお残っているということを発見したことが本論文の卓抜した点であるとされた。

また、論文の後半では研究で得た知見や考察を、新に現在の美術・教育状況において生かす可能性について考察しており、美術を広く景の教育として捉え直すことで、日本画が有していた世界観を美術教育実践に取り入れる可能性を論じている。そして、現代の景色観とそれが今後どのように展開していくかについての考察をしている点が優れていると評価された。

そしてまた、盆景について重層的に探究することによって、日本画の変遷の歴史的意味を構造化して捉え直し、また美術の教育が過去の作家の見方を知るという意味でも、あるいは人々のものの見方に影響を与えるという意味でも非常に重要であることを見いだしたことが本論文の特に優れた点であるとされた。

以上のような点から、審査会において課程博士論文として非常に高い水準にある優れた論文であることを審査員全員一致で評価した。

総合審査結果として、本研究の内容は、美術表現を追求する制作者独自の探求の姿勢をもって達成することが出来たものであり、また、その研究に対する強い信念があつてこそその成果であるとされた。そ

して、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められる、論文、作品共に優れた研究成果であると高く評価し、総合的に合格とした。